

同一の胃に悪性リンパ腫と癌腫が共存する症例は非常にまれで、文献的に検索した結果、本邦においての報告は本例を含め24例である。この場合、癌腫は早期癌であることが多く、25例中15例を占め、一方、悪性リンパ腫は進行したものが多く、sm までにとどまるものは本例を含めわずか3例であった。このことより、両者が共存する場合、悪性リンパ腫は癌腫の発生前に先行するのではないかと考えられた。今回我々は、76歳女性で、1年2カ月という長期的観察を行ない、悪性リンパ腫発生7カ月後に同一部位より2個の分化型早期癌の発生を確認した症例を経験したので、若干の文献的考察を加えてここに報告する。

#### 10) 原発性小腸悪性腫瘍の3例

草間 昭夫・川合 千尋 (日本歯科大学)  
真部 一彦・松木 久 (外科)

小腸原発の悪性腫瘍は比較的希な疾患であり、全消化管悪性腫瘍中約2%で、癌は十二指腸に、肉腫は主として回腸に多いとされている。今回我々は、小腸の非上皮性悪性腫瘍を3例経験した。第1例は、回腸末端部原発の悪性リンパ腫、第2例は、回腸原発の平滑筋肉腫であり、いずれも腹部腫瘍を主訴に入院し手術が施行された。もう1例は、胃癌術後で、上部空腸に原発した悪性リンパ腫による穿孔性腹膜炎で、手術が施行された症例である。何れの症例も、術前の確定診断の成されないまま、やむなく手術が施行された。今回、小腸原発悪性腫瘍の術前診断の難しさと重要性を痛感したので若干の文献的考察を加え報告する。

#### 11) 昭和54年6月よりの7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例の実態と予後について

本間正一郎・小林 英司 (県立六日町病院)  
高橋 辰弥 (外科)

魚野川最上流域(人口5万8千人)を診療圏として昭和54年6月新築移転以来7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例を検討した(昭和61年5月現在)。症例数(性、年度、部位)、手術(緊急・予定、回数、入院期間合併症手術数)、予後(術後管理、死因、死亡場所)等。

①症例は近年著増(昭和60年度20例)。しかし70才以上が過半(39/64)、しかもその半数が緊急ないし準緊急手術例(20/39)。

②初回手術入院死4例(縫合不全2, その他2), 合併症手術8例(縫合不全3, 癒着性腸閉塞2, その他3)。

③死亡29例中脳卒中1例, 虚血性腸閉塞(推定)1例

以外原病死。また末期入院死亡12例(うち2例内科依頼), 末期入院自宅死4例, 自宅死9例。

以上より臨床的問題点として診断面の他に縫合不全対策(open suture method, 変則3層腹壁閉鎖), 術後補助療法(動注等), 末期医療対策(ホスピスの苦痛除去等)が挙げられた。

#### 12) 虫垂粘液嚢胞の2例

渡辺 和夫・原 滋郎 (県立小出病院)  
大村 康夫 (外科)

急性虫垂炎をはじめ、回盲部周辺の疾患は、極めて多いが、その中で、比較的稀な虫垂粘液嚢胞を2例経験したので、報告致します。

症例1 71才、女性。右下腹部痛にて来院。回盲部腫瘍、熱発、白血球増多より、急性虫垂炎の診断にて手術。虫垂は嚢腫状に腫大し、回盲部への癒着、炎症著しい為、回盲部切除術施行。病理診断は mucinous adenoma of appendix。

症例2 64才、男性。胆石症術後1年目、右下腹部腫瘍触知され入院。CT、CF等にて虫垂腫瘍の疑いにて手術。虫垂は、根部を残し、嚢胞状に腫大し、虫垂間膜や回盲部周囲には、リンパ節腫大や、腫瘍性変化を認めなかった為、虫垂切除術施行。病理診断は、mucinous adenoma であった。

以上の症例報告に若干の文献的考察を加えて、報告する。

#### 13) 消化管粘膜下腫瘍35例の検討

高野 征雄・工藤 進英 (秋田赤十字病院)  
丸山 明則・金子 一郎 (外科)  
広川 恵子

過去15年間に当科で経験した消化管粘膜下腫瘍35例について検討した。病理組織学的には悪性腫瘍13例(悪性リンパ腫6例, 平滑筋肉腫5例, カルチノイド2例)と良性腫瘍22例(平滑筋腫7例, 迷入腺4例, 脂肪腫, 線維腫, その他)であった。発生部位は、食道, 胃, 十二指腸, 小腸, 大腸, 直腸と全ての消化管に認められたが胃に22例と最も多く見られた。最大腫瘍径は良性腫瘍の多くは3cm以下であったのに対し、悪性腫瘍ではほとんどが5cm以上であった。術前に良悪性を鑑別する事は困難な場合が多いが最近経験した悪性腫瘍6例で頻回な内視鏡下生検, CT, 血管造影にて術前診断が可能であった。悪性腫瘍では、消化管癌に準じたリンパ節郭清を伴う術式が選択されたが、絶対治癒切除術を行い得た8例は全例予後良好で最長14年生存中である。以上より

今後とも術前診断に特殊生検，総合画像診断を採用し，積極的な手術療法を行う方針である。

14) 肛門手術におけるレーザーメスの使用経験

磯部 茂・森 隆 (社会保険浜松病院)  
中村 昌樹・小山 仁 (大腸肛門科)  
堀川 征機・浜辺 昇

社会保険浜松病院大腸肛門科において肛門疾患（内外痔核，痔瘻など）で手術を施行している症例は，外来手術も含め年間約1,000例に達し，満足しうる成績をあげている。しかしながら術後疼痛などを訴える症例もあり，早期退院をめざすうえ，これらの症例に対し何らかの対応が必要である。今回レーザーメスを使用する事により術直後の疼痛の緩和，出血の防止，また創の治癒状態が良好であることを知り報告する次第である。

症例は昭和61年1月より6月末までに当科に入院，手術した432例中，結紮切除術（3ないし4ヶ所）を施行した275例について，年齢別に3群にわけて比較検討した。

結果：術直後の疼痛の緩和に関しては各年齢群ともレーザーメス使用例が優れており，術後の創治癒の状態は，特に高齢者ではレーザーメス使用例の方が良好であった。さらに症例をかさねて検討する予定である。

15) 経皮内視鏡的胃瘻造設術および経胃瘻的  
空腸栄養カテーテル留置の試み

佐藤 眞・相馬 剛 (新潟労災病院)  
豊田 精一・塚田 昭一 (外科)

経腸栄養の投与経路として経鼻チューブ留置，外科的胃瘻術などがあるが留置の苦痛や poor risk の患者には開腹術が困難などの問題点がある。我々は開腹術を必要とせず，安全かつ短時間に施行しうる経皮内視鏡的胃瘻造設術を施行したので報告する。方法は MICRO-VASIVE 社の胃瘻カテーテルキットを用い内視鏡にて胃体前壁をセルジンガー針にて穿刺し，胃瘻作成を行った。症例は重度脳障害を有する4例であり，施行時間は約10分間で全例トラブルなく経腸栄養剤の投与ができた。この手技，有用性について報告する。

16) remnant of renal blastema

村上 博史・和田 寛治 (長岡赤十字病院)  
小林 清男・神谷岳太郎 (外科)

私達は，非常に稀な後腹膜腫瘍である，remnant of renal blastema の1例を経験したので，報告する。症例は，31才男性で，6年前よりしだいに増大する右

上腹部腫瘤を主訴として来院した。検査上は，CEA 6.1と軽度上昇を示すのみで，他は消化管の検索でも異常を認めなかった。手術では，13×10×8 cm の腫瘤が右上後腹膜腔内に位置しており，摘出術を施行した。病理所見では，内容として淡黄色ゼラチン様物質を含み，被膜は大部分，粘液産生上皮からなり，一部肥厚した部分には，糸球体や尿細管様組織が認められ，remnant of renal blastema と診断された。又，酵素抗体法では，組織の一部に CEA が染色された。

remnant of renal blastema の概念は次のように考えられている。後腹膜腔の独立した腫瘍であること。充実性と嚢胞性があり，胎生期の泌尿生殖原基から発生したものであること。

17) ゴルフショット中に発生した尿管腎盂溢流の  
1 治験例

興梠 建郎・小林 貞雄 (水原郷病院)  
下田 聡 (外科)

外傷，手術操作，悪性腫瘍等の原因がなく，尿が尿管あるいは腎盂外に漏出することは，極めて稀な現象で日常経験することはほとんどない。

今回，45才男性で，ゴルフショット後突然の激しい腹痛を来し，ショック状態にて来院，緊急開腹手術で，左後腹膜腔に多量の尿漏出がみられたため，尿管カテーテル法，後腹膜腔ドレナージにより，救命し得た症例を報告する。術前の DIP では尿漏出は確認できず，又術中及び術後の検査でも，尿漏出部位は不明であった。術前の DIP で左腎盂の拡張，立位～臥位で腎の上下動巾が広く，腎固定異常，あるいはそれと尿管結石の存在が考えられたが，確証はない。

18) 著明な口内炎を伴ない，中部および  
下部食道に web 様狭窄を呈した良性食  
道狭窄の 1 例

神田 達夫・小田 幸夫 (新潟県済生会)  
榎本 一彦 (三条病院外科)  
福島 茂樹 (同 内科)  
宮下 薫・川口 英弘 (新潟大学)  
佐々木公一・小山 真 (第一外科)

良性食道狭窄は比較的稀な疾患であるが，その原因は多彩である。鉄欠乏性貧血，舌炎，嚥下障害を主徴とし，上部食道に特徴的な web 像を認める疾患単位として，Plummer-Vinson 症候群が古くから知られている。

我々は著明な口内炎を伴ない，嚥下困難を主訴とする女性に，中部および下部食道の2か所の web 様狭窄を認める症例を経験した。